# その六　瀬戸島

瀬戸内海は世界中でもっとも穏やかで美しい海。台風が来ればそんな褒(ホ)め言葉なんか吹っ飛ぶが、普段は優しい波が宝石のような島々を抱き込んで小さな押しくらまんじゅうを繰り返す。

初夏の日の出に雲が赤く染まる。定員十人ほどの小船が小波を後方両斜めに残しながら小島に向かう。乗客は俺だけ。到着予定時刻は八時。

この船の役目の一つはその島から小中学生とおそらく最後になる高校生一人を乗せて学校がある島に送り届けること。夏休みになるとしばらくは釣り客専用になる。

視線を島の付録の岩々に移動させる。シャッターを押すたびに鼻は潮の香りを拾っては押し出す。そのうち酒の臭(ニオ)いが混ざる。早くも船長に酒が入った。大きな赤い鼻をヒクヒクさせながら舵を持つ船長。そんな船長に土の臭いを感じる。瀬戸内の島民にとって大切なものはコップ一杯の海水より、ひとつまみの土かも知れない。

旧約聖書によれば人は土から生まれた。人の生活は土を文字通り土台とする。土から水が湧き出るように因果が生まれ世界が始まった。つまり人は土から生まれた。

因果を強調しすぎると成り行きが隠れて偶然が現れる。成り行きを忘れてはならない。偶然とはロマンではなく単に視界を狭めるもの。用心しなければならないのは、偶然が牙をむく事。

だから成り行きを記憶して忘れてはならない。何故なら偶然と天災は恋人同士だから。

「天災は忘れた頃（偶然）やってくる」と言うではないか。

船が島に着いた。問題の土に足が着いた。

＊

島の周囲は五キロほど。瀬戸内の他の島と違ってこの島の土台は緑白色の緑泥片岩（リョクデイヘンガン）という変成岩。庭石や石垣に使われる馴染みある岩石だ。濡れると鮮やかな深緑色に急変する。

平地がないので集落は島の玄関の港に集中している。

中心は漁業協同組合の支所と公民館。そして漁業を営む傍ら釣り客用の民宿が約十軒。そのうちの一件は酒屋を兼ねる。専業漁家は二十数軒。雑貨屋が数軒。そして銭湯が一軒。混浴ではない。鮮魚加工場や漁船はもちろん、あらゆる物を修理修繕する工場もある。そして住宅。郵便局や交番はない。

人口は三百人足らず。四年前に来た時の八割程度。典型的な過疎の島で子供は数えるほどしかいない。十年以上も前、校庭がない小さな小学校だったが……廃校になった。

若者は少ないが従姉の波江（ナミエ）を含め、後を継ぐ――つまり漁師として残る青年もいる。しかし、高校を卒業すると都会に出る者が大半。今や中学生も卒業すると……。波江（ナミエ）には事情が……なかった。

二世（フタセ）家の本家、つまり俺のルーツはこの瀬戸島。祖父や祖母は随分前に亡くなったが、今、

居るのは伯母さんと従姉の波江と従弟。

伯母さんは二世家の血を引いている。養子を迎えて一代、永らえた。長男――アメリカに渡った、あの伯父さんは自分の才能を生かすために島を飛び出した。次男の俺のオヤジも島を出て、結局長女の伯母さんが二世家を継いだ。

小さい島だが結構大物を輩出している。それは幼少期を自然豊かなこの島でゆったりと過ごしたからだ。ここでは自然相手に自分で考えて生きていかなければならない。

さて四年前の冬に漁師だった義伯父――波江の父が漁船火災で急死した。

急きょアメリカから伯父さんが戻ってきた。オヤジも俺と葬式に参列するためにこの島を訪れた。葬式が終わると伯父さんは伯母さんに本家を畳んで大阪に行くべきだと提案した。もちろん大阪で住むとなれば家が売れたとしても心許ないが「何とかするから安心しろ」と伯父さんは言った。

しかし、あの時、伯母さんの脳裏には「自分が二世家を守らなければ」という使命感があったのだろうか頑として承知しなかった。俺からすれば「二世家を守る」必然性を理解できなかった。ただ高校を卒業していた波江の将来については相談していたが、当の波江は「残る」とだけ言って今日に至っている。

すぐ下の弟は既に大阪に出ているし、一番下の弟も来年高校を卒業する。ところが、もうすぐ二十四になる波江に島を出る気配はない。

＊

一ヶ月前に伯母さんから手紙をもらった。このままでは波江が不憫なので大阪で生活させたいという内容だった。伯母さんにしてみれば、自分と同じ運命を歩むかもしれない娘を何とかしたいと思ったのだろう。波江の年齢からして当然だ。そのために来たが仕事も兼ねていた。

大広間の立派な座卓をはさんで波江が正座している。アイロンが当たっていない黄ばんだ白いブラウスにくたびれた紺色のスカート。中肉中背。小麦色の健康的な肌。髪の毛は短く先端がカールしていて、襟足は長く色っぽい。化粧はしていない。それなのにキレイ……と言うより美人。従姉でなければ恋人にしたいほどの器量がある。同じ血を引く俺とはまったく違う。部品は同じなのに組み合わせに原因があるのか。

「しばらくいるから、その間に決めればいい」

波江は「はい」とだけ答えた。

本家だけに家は大きい。平屋だが部屋は七間もあり柱も太い。しかし、襖や障子は荒れるに任されていて痛々しく風に揺れている。ただ仏間だけは小綺麗に手入れされていた。

「神妙な顔せんといてーな。いじめに来たんと違うんやから」

波江は首を横に振って笑う。年上なのにいじらしく見える。

「風呂に行ってくるわ」

立ち上がると姿を消す。しばらくすると風呂桶と石けんとタオルを持ってきてくれた。

「ビールも頼むわ。風呂上がりにグッとやりたいから」
「生意気」という声が返ってきて笑い声が生まれる。ブランクが埋まったようだ。
島民は一軒しかない銭湯を利用する。小さな島だし瀬戸内だから雨が少ない。内風呂がある家はない。この銭湯は季節や天候にもよるが、だいたい昼下がりから日没に掛けて営業する。ひとつの湯船を男と女の入浴時間をずらして使う。
「湯」と書かれた暖簾をポンと払いのけた時、後ろから息を切らした波江の声がした。
「今、女の入浴時間！」
走って追いかけてきたのか、額に玉の汗が噴き出ている。
「別にエエやんか。よそ者やと、とぼけて入るわ」
「オバアチャンばっかりよ」
「ほんだら、やめや」
波江は口に片手を当てて笑い出す。もう一方の手で空のビール瓶を二本持っている。酒屋に返却してビールを買うつもりだ。波江も伯母さんもアルコールは嗜まない。誰がビールを飲んだのか。

＊

翌朝、波江は膳を片付けると防潮堤へ行く。網の手入れをするためだ。もちろん本家では漁をしていない。その網の持ち主は島一番の漁師で波江にとってささやかなアルバイトだ。

波江が防潮堤の幅が広い下の段で網に付着した海藻を採っては海に捨てる。海の底は緑色に透き通って輝いている。そう、緑泥片岩の演出だ。

海面の反射を消すために偏光フィルターをレンズにつけて波江に近づく。

「チーズ」と言ってシャッターを押した。美人だから絵になる。

「まあ」

そして意外な返事を聞く。

「マモルちゃん。出るわ」

「そうか。良かった」

もう一度シャッターを押すと海藻を投げつけてくる。重大な決心を茶化されたと思ったのだろう。

「この仕事も、最後かも。記念写真や」

俺は腕に引っかかった海藻を投げ返す。波江が立ち上がったので慌てて二、三歩後退する。本気で怒ったと思ったから……そうではなかった。前を横切って集落に向かう。「相談しに行く」と一言残して。

人は一生の間に何回か転機にぶつかる。それは受験？　結婚？　失恋……かも知れない。他にもあろうが、これぐらいしか思いつかない。転機には偶然性を伴う。偶然だから拡散が始まる。転機を「因」とすればそれ以降が「果」だ。

先程、波江は決心した。これが転機になるのか、どうかはわからない。俺自身、初恋が苦い人生の転機だった。島を出ることが転機なら俺は波江の人生を左右するのかも知れない。複雑な気持ちになる。

＊

取り敢えず大阪を案内するため二日後に島を出る事になった。俺にとってもその方が都合がよかった。と言うのは、例の「心の旅」シリーズ用の写真撮影にもう一日欲しかった。海から島を撮りたいので波江に漁船を手配してもらった。

一時間もあれば一周できるほどの小さな島だが、じっくりと撮影したので三時間近くかかった。漁船の船長は波江と同じ歳ぐらいの若い男で気持ちよく俺のわがままを呑んでくれた。

昼前に港に戻ってこの島で唯一の神社を訪れる。小高い岬に位置する神社は島の冠婚葬祭を一手に引き受ける。それは集落のどこからでも鳥居が見えるからだ。神主はいないが手入れが行き届いている。

神社とそこから見える海と島々をフィルムに収める。早起きしたので少し早いが波江が握ってくれたおにぎりを食べる。緑が溢れていて昼寝にもってこいだ。目を閉じた時、一瞬、頭の中が空っぽになる。

いつもだったら、あの忌々しい美英子の顔が浮かぶが、何故か知秋（チアキ）の顔が浮かぶ。

この春、新潟方面を旅行して以来、知秋を避け続けた。そのあと五月の連休に旅行したいと

誘われたが断った。二人っきりなれば必ずブレーキが故障する。目先の欲望で行動するのは危険すぎる……というより、最大の理由はキライじゃないが恋人だと思っていないこと。本心を一週間前の雨の日に伝えた。

眠るどころか罪悪感に包まれてしまう。正当化すると言うよりもこの罪悪感から逃避するために起き上がる。カメラから広角レンズを外して港や集落を撮影するために望遠レンズを装着する。右目はファインダーを、左目は港を……左目の指示に従って右目がある光景を捉える。

「波江！」

右目を疑う。左手が素早くピントを合わす。望遠レンズは波江を捕らえていた。

＊

瀬戸内の真っ青な空とは逆に晴れない気持ちを車窓の海に同化させる。規則正しいレールの音が夢のない眠りへと引きずり込む。しかし、醜くさが混じった淋しい血が全身を走り巡る。

人は様々な出来事を予想して対応しなければならない。肉体に関わる問題なら自分の経験と先人が残してくれた経験を利用できる。ところが心の問題はそうはいかない。心は抽象的で複雑。遺伝子からの情報はないし、経験できる因果律の認知は自分一代限り。つまり自分の経験だけで対処しなければならないからむずかしい。

一生の間に経験した様々な事件からどれほどの因果律を見つけられるのか。それに偶然が不気味な雲のように頭上で漂うからますます不安になる。しかし、空気や水が肉体に必要なよう

に、因果律が精神面に必要であることは確か。この必要性、必然性が苦悩につながり輪廻という負担を強いる。

だから宗教が存在する。宗教は一代限りという原則の例外として存在する。例外だから、認める人・認めない人――つまり、信じる者・信じない者という二種類の人を作る。

信じる者は幸せ。

信じない者は不幸せではないが、苦悩や輪廻をどうやって乗り越えるか――という問題を抱える。

たまには因果律を捨て自分を空っぽにして偶然に身を任す事が必要なのかもしれない。

＊

昼下がり、神社でうたた寝している間に防潮堤で最後の網の手入れをしていた波江が消えた。しかし、すぐ見つかった。漁船の船底にいた。その漁船は島を一周してくれた船だった。

望遠レンズが捕らえた――黒光りする青年の背中の下で目を開けて眠る波江を。

偶然に。